

選擇集大觀出づるの歡び

善 譽 定 慶

法然上人行狀繪傳卷六等によるに淨土開宗は承安五年春三月にして、明大正十三年が正しくその七百五十年目に當る事で記念大會を始め諸般の記念事業教化革新の目論見は、次から次へと、或は公共的に或は個人的に進捗しつゝあることは延いて教界の爲のみならず、國民文化促進上大慶の一と算へても過言ではなからう。

事物の成立を後より見る時は可成りに平易に感ぜられもし、あゝもせば宜敷からうにと附言の一も洩らし勝ちの、實際に當つてする人々の苦心と右顧左眊しての氣兼ねさは少々理解ある者の諒察する所なり。佛教界の過半勢を占むるは淨土教系ならん。

然かもその元祖たる法然上人がこれら多宗派の根源を開立せられたる時、それは過去七百有年間の國民思想界を暖かく、はぐまれし淨土教の開けし時にして、惠まれた末流の忘るゝことの出來ざると同時に、この口唱稱名の開宗に動機を得て開らけたと一般から推斷せられる唱題目宗日蓮門徒も、其他刺戟を得た既存宗派の活氣をうけた教徒も、共にありし昔を顧みて奮渾一番一時期を劃すべき記念第七百五十年は、眼前に迫りしなり。

常に書物に親しみ教學従事の者の取るべきは、釋義教化の革新と同時に現代まで發展進化し來たれる過去を顧みた所を纏めて此の際發表し、更にそれを根柢において將來を啓發せしめられたきものであり、學者自身も然かし感せられつゝ、考察せられつゝあるを信するも、困難は思ふよりもまして事に當りては困難一層大にして障礙交々來り、中止挫折は免れ難きなり。

然るに今回、野生の最も私淑畏敬する藤堂祐範師は、寺務の暇を京都帝國大學司書の繁務の間に身を置きながら、閑人の思ひつゝ爲し得ざる大事業を成し遂げられたり。それも、繁忙な大家にあり勝ちな漏脱誤植等は、さすがに師の綿密な頭腦と着實なる性行に相俟つて本文に多大の誤植さへ見えず、研究組織發表の體形に、新しみを見せ、爲めに高德の題字笈を以て讚意を表せられ、前序後跋に學界の重鎮感歎の辭を並べられ、帙の高尙と表紙の古板散らし刷り、等は、内容の數十實大寫眞版、研究論文並に新舊校合大正選擇集本文と併せて、實に選擇集大觀の名は誣ひざるものなり。

淨土教各派の學僧之を得ば、百種に近き異本の體裁と内容を一目瞭然の中に知られ、過去刊行の知られたる分は全部收められたれば、今後異れる本集を得ば、其が價值を知るパロレメーターともなる物にして、書架の裝飾に併せて宗乘學究に必須の重寶なる書の出でたる譯にて、誠に欣喜措く能はざるなり。

凝然の源流章(淨全十五
五九〇頁)には選擇集を以て、淨土立教となしてゐる。

後鳥羽天皇御宇建久九年歲次戊午干時源空年六十六錄「選擇本願念佛集一卷」開爲立淨土字大顯義理
自此已後淨教甚昌

されど事のなるは成るの時になるにあらず、それ以前に溯り求むべきなり。上人開宗の思想開發は諸傳の示す如く承安五年が妥當ならんも、その思想典據内容を、組織立て、纏められた點よりいへば源流章の見方とならんかし。

されども、選擇集選述年代は一段に建久九年説多くして、四十八卷傳、選擇傳弘決疑鈔、十六門記等の本宗所傳の外、西山家の密要決、行觀の私記等然かるも亦別に了譽作淨土眞宗付法傳は建久三年説、正源明義集、選擇之傳(淨全八六 八頁)は建久八年説、西山私聚鈔所引の正治年中説、建仁元年説及び元久二年説あり、又元久元年説もありて、西山家の私聚鈔所引多念義説や同「私集鈔」(堯惠作)、眞宗の拾遺古德傳、大澤良榮の見聞は然かくせり。これらの選述異同辨と分派の併合考證は細端に入れば省くも要するに、各派相承相違と共に異同あり一致せざるが現状なり。開宗起算の標準を強ひてこれに求めんよりも、思想發露完成の口稱念佛立宗は、承安五年として、記念の年と定めて茲に、七百五十年記念を眼前に控へるに當り、その典據教示の選擇集流布の變遷史を内容的に書史學的に大成せられたる選擇集大觀の出版をなして、學究者としての記念大事業を完成せられたることは、吾れ人共に歡喜せざらんや。

著者藤堂祐範師の大功讃仰と共に、これが上梓に奔走せられたる我が畏兄江藤漱英師と、講演の華を添へられたる石井先生と校訂本の先鞭をつけて譲られたる高野山大學教授三長覺靜師の隠れたる助功は、蓋し著者自叙の讃助者中の尤なる方々ならん。

匆卒筆を走らす、前後體裁をなさざるは蓋し狂喜の致すところか、讀者諒せられたし。

(二二、一、一九)